

発達障害のある子どもをもつ家庭を対象とした
自粛時の活動ニーズ調査
＜第1回（3月期）調査＞

余暇活動支援活動グループ有志

調査代表：吉澤昌好（認定NPO法人トラッソス）

調査分析担当：筑波大学澤江研究室

調査概要

- 目的：

現在、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、国が一体となって取り組んでいる。そのなか、私たちが実施してきた知的障害・発達障害（以降、発達障害）のある子ども／大人（総じて、子どもと表記する）を対象とした身体活動を中心とした余暇支援もまた中止・制限されている。

その一方で、この自粛時において、私たち活動グループに何かできることがないのかを話し合うなかで、この状況下において、発達障害のある子どもやご家族の方が、現在、どのような状況で過ごし、どのような思いでいるのかを把握することの必要性を確認した。

そこで、発達障害のある子どもをもつ家庭を対象に、自粛時における子どもの生活状況と保護者の状況を把握することを目的に調査を行うこととした。

この調査をパイロット研究として位置づけるとともに、この調査結果をもとに、今、必要とされる支援とは何かを仮説的に提案していくこととした。

調査概要

- 対象：全国の身体活動を中心に余暇活動を行なっている団体・組織を通して、調査に協力してくれたそれらの活動団体・組織の会員・利用者の保護者69名
- 調査方法：対象者に質問項目をセットしたGoogle Form（Google社製）のURLを伝え、回答することを求めた。多くの回答が自由記述のため、その回答内容をもとに類似のものを集め、代表的な表現にしたうえで回答数を算出した。
- 期間：2020年3月18日から4月10日
- 倫理：アンケートのはじめに「回答しないことで、メンバーや家族が不利益を被ることは断じてありません。回答が漏洩しないように、また個人が特定されないようにいたします」を明記し、データを目的以外に使用せず、データが漏洩しないように厳重に管理した。

対象の属性

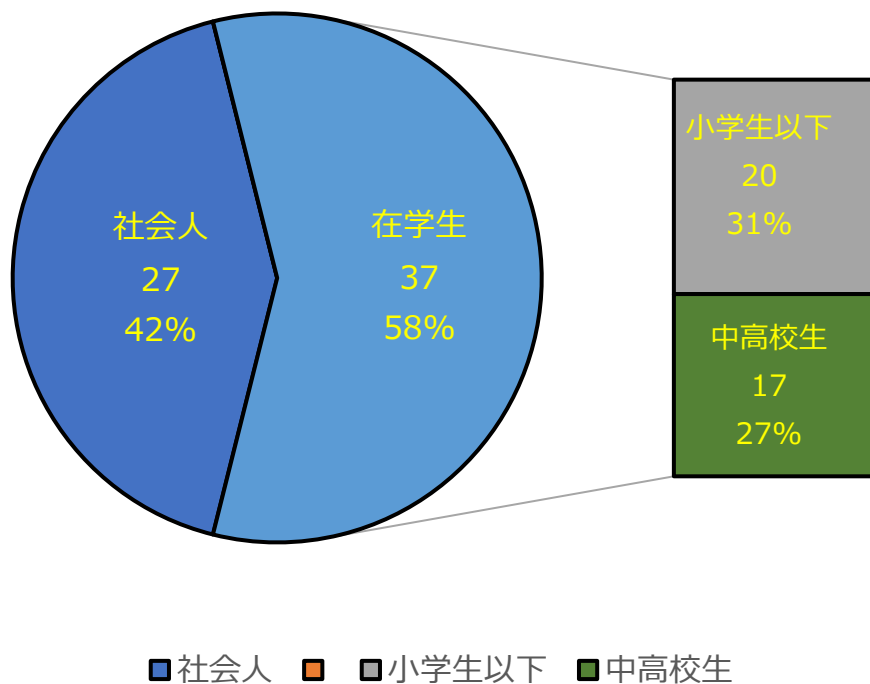


図1：所属

在学学生の子どもがもっとも多く、ついで社会人であった。その比率は約6：4であった。

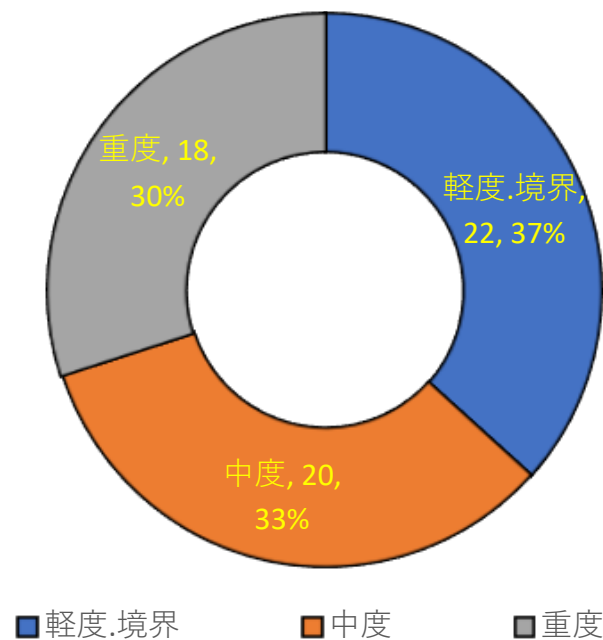


図2：障害程度の割合

気になる程度と軽度（以降、軽度）の子どもがもっとも多く、中度、重度の子どもの順であった。その割合の差は大きくなかった。

対象の属性

表1：対象者のその他の属性

自粛時の活動ニーズに影響する可能性を考えて質問項目を設定した。

属性	回答項目	度数（人）	割合（%）
配偶者の有無	あり	52	83.9
	なし	10	16.1
要介護者	あり	12	19.4
	なし	50	80.6
子どもの数	1人	21	32.8
	2人	33	51.6
	3人以上	10	15.6
日中居る場所	在宅勤務・自営業・専業主婦夫	23	31.5
	通勤先	50	68.5
地域	都市部	46	76.7
	地方部	14	23.3

結果 子どもの生活変化

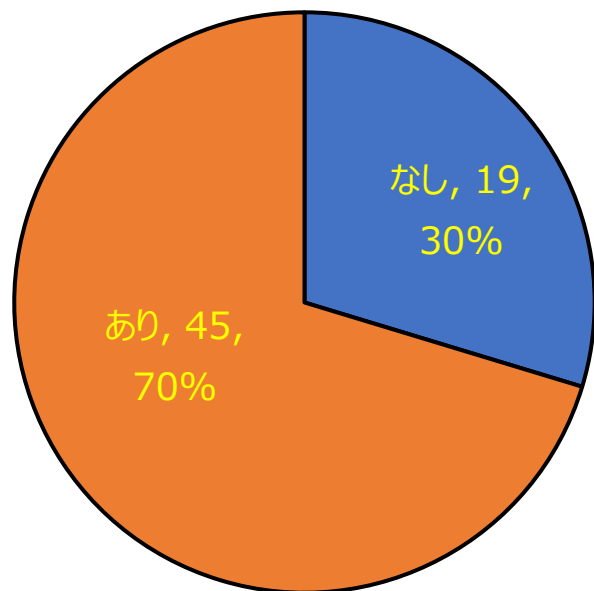


図3：子どもの生活変化

全体の7割の家庭において自粛に伴って、子どもの生活に変化があったと答えていた。

表2：子どもの生活変化のありの内訳
(N=45 複数回答)

内訳	度数:人	割合:%
平日、家や屋内にいる時間が増えた	23	51.1
休日、外出する時間が減った	9	20.0
起床や就寝時間が乱れた	6	13.3
ゲームや動画、テレビなどの視聴時間が増えた	6	13.3
これまでルーティンだったことができなくなった	6	13.3
体を動かす時間が減った	6	13.3

結果 子どもの生活変化

表3：子どもの生活変化と属性（抜粋）との関連

χ²検定（n.s.：統計的に有意でない†：p<.10, **:P<.01；下線は残差分析で有意であったところ）

□ピンクはもっとも割合が高かったもので、青はその次に高かったもの

子どもと家族の心理的情况	所属				χ ² 検定	障害程度						χ ² 検定	日中いる場所				χ ² 検定
	在學生		社会人			軽度・境界		中度		(最)重度			在宅		外宅		
	度数	割合	度数	割合		度数	割合	度数	割合	度数	割合		度数	割合	度数	割合	
D1：子どもの生活変化	9	24.3	10	37.0	n.s.	<u>3</u>	13.6	9	45.0	7	38.9	†	<u>2</u>	8.7	17	34.0	**
	28	75.7	17	63.0		<u>19</u>	86.4	11	55.0	11	61.1		<u>21</u>	91.3	33	66.0	
	37	100.0	27	100.0		22	100.0	20	100.0	18	100.0		23	100.0	50	100.0	
平日、家や屋内にいる時間が増えた	16	43.2	7	25.9		12	54.5	6	30.0	3	16.7		11	47.8	11	22.0	
休日、外出する時間が減った	1	2.7	8	29.6		2	9.1	1	5.0	6	33.3		5	21.7	4	8.0	
内 起床や就寝時間が乱れた	6	16.2	0	0.0		0	0.0	3	15.0	1	5.6		3	13.0	3	6.0	
内 訳 ゲームや動画、テレビなどの視聴時間が増えた	6	16.2	0	0.0		5	22.7	0	0.0	4	22.2		4	17.4	2	4.0	
これまでルーティンだったことができなくなった	2	5.4	4	14.8		0	0.0	3	15.0	3	16.7		1	4.3	5	10.0	
体を動かす時間が減った	3	8.1	3	11.1		1	4.5	2	10.0	3	16.7		1	4.3	5	10.0	

χ²検定によれば、障害が軽度の子どもの方が変化があると答えている保護者が多い傾向にあり、また日中に自宅にいる保護者の方が変化があると答えている人が有意に多かった。

内訳では、在學生のもつ保護者は、平日、家や屋内にいる時間が増えたことに加え、睡眠時間の乱れや、ゲームや動画などの視聴が増えたことに変化を感じている人が多く、一方で社会人をもつ保護者は、仕事おわりや休日などの余暇時間が減っていたことに、また障害が重度の子どもをもつ保護者は、軽度の子どもをもつ保護者より、休日などの余暇時間が減っていたことに変化を感じている人が多かった。

結果 子どものストレス

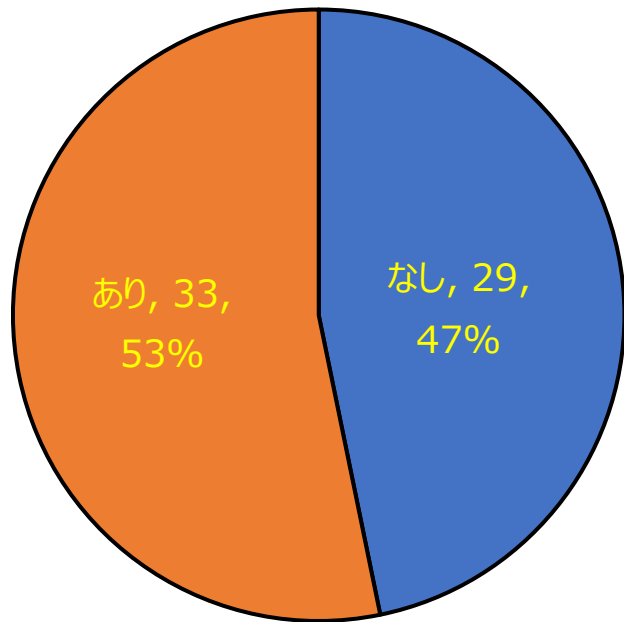


図4：子どものストレスの様子

全体の半分の家庭において、子どもがストレスを感じている様子がみられた。

表4：子どものストレスの様子のある内訳
(N=33 複数回答)

内訳	度数:人	割合:%
精神的に不安定な様子(甘えやイライラ等)	23	69.7
自傷や他害などの行動問題	7	21.2
なんとなく元気のない様子	3	9.1
ストレスによる体調不良、微熱等の身体症状	3	9.1

結果 子どものストレス

表5：子どものストレスと属性（抜粋）との関連

χ²検定（n.s.：統計的に有意でない+：p<.10, **:P<.01、下線は残差分析で有意であったところ）

□ピンクはもっとも割合が高かったもので、青はその次に高かったもの（度数3以上）

子どもと家族の心理的情况	所属				χ ² 検定	障害程度						χ ² 検定	地域差				χ ² 検定
	在学学生		社会人			軽度・境界		中度		(最)重度			都市部		地方部		
	度数	割合	度数	割合		度数	割合	度数	割合	度数	割合		度数	割合	度数	割合	
D2：お父さんのストレスの様子	15	41.7	14	53.8	n.s.	<u>5</u>	23.8	10	50.0	10	58.8	+	24	54.5	<u>2</u>	14.3	**
	21	58.3	12	46.2		<u>16</u>	76.2	10	50.0	7	41.2		20	45.5	<u>12</u>	85.7	
	36	100.0	26	100.0		21	100.0	20	100.0	17	100.0		44	100.0	14	100.0	
精神的に不安定な様子(甘えやイライラ等)	15	41.7	8	30.8		11	52.4	6	30.0	6	35.3		14	31.8	8	57.1	
内 自傷や他害などの行動問題	5	13.9	2	7.7		2	9.5	3	15.0	2	11.8		4	9.1	3	21.4	
内 なんとなく元気のない様子	2	5.6	1	3.8		2	9.5	1	5.0	0	0.0		2	4.5	1	7.1	
内 ストレスによる体調不良、微熱等の身体症状	1	2.8	2	7.7		2	9.5	1	5.0	0	0.0		1	2.3	2	14.3	

χ²検定によれば、**障害が軽度**の子どもをもつ保護者が、子どもにストレスを感じていると答えた人が多い傾向があり、また**地方部**の保護者が、子どもにストレスを感じていると答えた人が有意に多かった。

各属性の内訳の割合傾向は全体の傾向と同様であった。

結果 家族のストレス

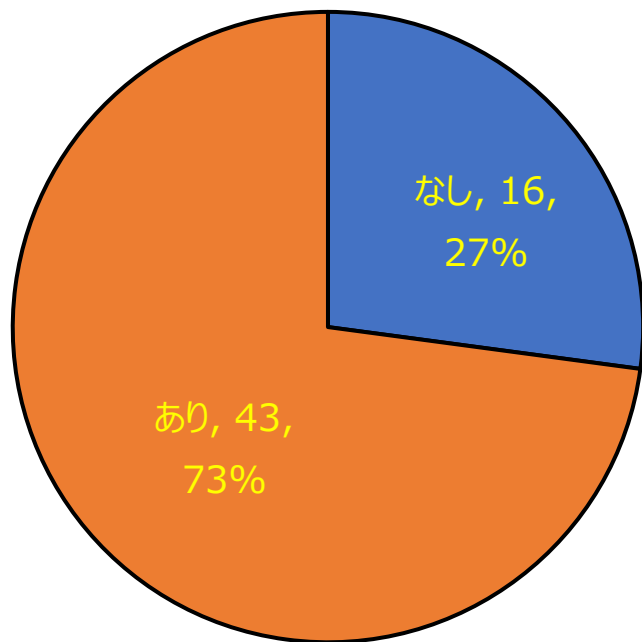


図5：家族のストレスの様子

全体の約4分の3の家庭において、家族がストレスを感じている様子がみられた。

表6：家族のストレスの様子のありの内訳
(N=73 複数回答)

内訳	度数:人	割合:%
子どもへの対応	13	30.2
家事量が増えたこと	7	16.3
先の見通しの不安	5	11.6
新型コロナに対する不安	4	9.3
いつものペースで仕事や家事	3	7.0
家族間のトラブル	3	7.0
自分の時間が持てない	2	4.7

結果 家族のストレス

表7：家族のストレスと属性（抜粋）との関連

χ²検定（n.s. 統計的に有意でない）

□ピンクはもっとも割合が高かったもので、青はその次に高かったもの（度数3以上）

子どもと家族の心理的情况	所属				χ ² 検定	障害程度						χ ² 検定	
	在学生		社会人			軽度・境界		中度		(最)重度			
	度数	割合	度数	割合		度数	割合	度数	割合	度数	割合		
D3：家族のストレス	8	23.5	8	30.8	n.s.	5	23.8	6	30.0	4	23.5	n.s.	
	26	76.5	17	65.4		16	76.2	11	55.0	13	76.5		
	34	100.0	25	96.2		21	100.0	17	85.0	17	100.0		
内 訳	子どもへの対応	10	29.4	3	12.0		7	33.3	3	17.6	2	11.8	
	家事量が増えたこと	3	8.8	4	16.0		1	4.8	2	11.8	4	23.5	
	先の見通しの不安	4	11.8	1	4.0		3	14.3	1	5.9	1	5.9	
	新型コロナに対する不安	2	5.9	2	8.0		1	4.8	2	11.8	1	5.9	
	いつものペースで仕事や家事	2	5.9	1	4.0		2	9.5	0	0.0	0	0.0	
	家族間のトラブル	2	5.9	1	4.0		1	4.8	1	5.9	1	5.9	
	自分の時間が持てない	2	5.9	0	0.0		2	9.5	0	0.0	0	0.0	

χ²検定によれば、すべての属性と統計的には関連がなかった。

内訳をみると、**在学生**の保護者は、**子どもへの対応**にストレスを感じている人が多かったが、**社会人**の保護者は、子どもの対応より、**家事量が増えたこと**にストレスを感じている人が多かった。また**障害が重度の子ども**をもつ保護者は、そうでない子どもをもつ保護者に比べて、子どもの対応より**家事量が増えたこと**にストレスを感じていた人が多かった。

結果 この状況で求められること

表8：今、子どもに求められることは何か
自粛時において、どのような活動ニーズがあるかを尋ねた。

内訳	度数:人	割合:%
健康に関すること（例、運動することなど）	19	27.5
気晴らしに関すること（例、公園とかでめいっぱい体を動かすなど）	16	23.2
いつもと同じ状態になること（例、普段の生活パターンなど）	14	20.3
勉強に関すること（例、学校で授業を受けられるなど）	11	15.9
人との交流に関すること（例、友だちと過ごすなど）	7	10.1
新たな趣味や余暇活動をつくること（例、この状況に応じた活動を考えるなど）	2	2.9

結果 この状況で求められること

表9：この状況で求められることと属性（抜粋）との関連

□ピンクはもっとも割合が高かったもので、青はその次に高かったもの（度数3以上）

子どもと家族の心理的情況 D4：今子どもに求められること	所属				障害程度						配偶者				日中いる場所			
	在学学生		社会人		軽度・境界		中度		(最)重度		なし		あり		在宅		外宅	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合	度数	割合	度数	割合	度数	割合	度数	割合	度数	割合	度数	割合
健康に関すること	10	23.8	9	33.3	9	32.1	5	21.7	4	30.8	1	10.0	16	29.1	8	30.8	10	23.8
気晴らしに関すること	9	21.4	7	25.9	8	28.6	4	17.4	3	23.1	1	10.0	13	23.6	8	30.8	8	19.0
内 いつもと同じ状態になること	8	19.0	6	22.2	2	7.1	7	30.4	4	30.8	2	20.0	12	21.8	2	7.7	12	28.6
訳 勉強に関すること	11	26.2	0	0.0	5	17.9	3	13.0	1	7.7	3	30.0	8	14.5	5	19.2	6	14.3
人との交流に関すること	4	9.5	3	11.1	3	10.7	3	13.0	1	7.7	2	20.0	5	9.1	3	11.5	4	9.5
新たな趣味や余暇活動等をつくること	0	0.0	2	7.4	1	3.6	1	4.3	0	0.0	1	10.0	1	1.8	0	0.0	2	4.8

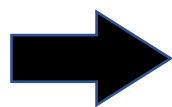
内訳をみると、健康に関することは、どの属性でも割合は高いなか、**障害程度が中度より重くなると、いつもと同じ状態になることを求めている人が多かった。**また**日中、外で働いている保護者**や、ここには載せていないが、**2人子ども（本人を含めて）をもつ保護者**も同様の傾向がみられた。そして**配偶者がいない保護者**は全体傾向と異なり、学校での授業などの**勉強すること**を求めている人が多かった。

考察 所属特性から

- 全体の7割の家庭において自粛に伴って、子どもの生活に変化があったと答えていた。
- この時期、子どもより保護者に、ストレスが高い傾向がみられた。特に在学学生をもつ保護者の場合は、生活リズムが崩れ、不活性な活動に興じる子どもへの対応に苦勞している姿が窺える。一方、社会人の場合は、日中は就勞していることが多いことから、休日などの余暇時間が減ったことに変化を感じている可能性があった。

今後、考えられる活動の工夫点（流動的であるため、継続的に評価は必要）

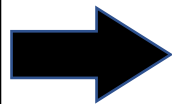
在学学生



生活リズムを整える
定期的に行えるもの

活動性のある
活動

社会人



余暇時間を過ごすことができるもの

考察 障害特性から

- 障害が軽度の子どもは、その発達段階によるが、社会状況に応じたなんらかの適応行動をとろうとするあまり、結果的にストレス反応を表出している可能性がある。もしくは障害が重くなるほど、内面的なストレスを表面に表していない可能性がある。
- 障害が重度の子どもの保護者は、余暇の時間が減ったことを変化として感じていることから、こうした子どもたちへの余暇活動への依存度が高いことがわかる。それがなくなったことで家で過ごすことが多くなり、結果的に家事量が増えた可能性がある。

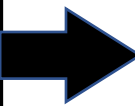
今後、考えられる活動の工夫点（流動的であるため、継続的に評価は必要）

コミュニケーションが比較的とりやすい子ども



主に言語的やりとりをしながらストレスを解消できる内容が望まれる

表面的にコミュニケーションが難しい子ども



こうした状況でもルーティンを大事にした活動が望まれる

考察 保護者の状況から

- 日中、子どもと向き合うことが多い保護者にとっては、子どもの気になることが増えてしまったことが推察される。
- 外で働いている保護者にとっては、子どもの健康であることを望みつつも、生計を成り立たせる等の理由から、いつもと同じ状態になることを望んでいる可能性がある。
- 配偶者のいない保護者が全体傾向と異なること、子どものストレスの割合の地域差については、今後、さらにデータを集めたなかで検討する必要がある。

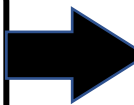
今後、考えられる活動の工夫点（流動的であるため、継続的に評価は必要）

日中、子どもと向き合うことが多い保護者



子どもの肯定的な面を保護者にフィードバックできるような活動が望まれる

日中、外で働いていることが多い保護者



子どもが安定的に過ごしている面をフィードバックできる活動が望まれる。

展望 おわりにかえて

- 今回、多くの保護者にご協力いただきましたこと、この場をかりてお礼を申し上げます。
- この調査結果をもとに、私どもは、さまざまな情報通信技術を駆使して、発達障害のある子どもたちの生活の一部を支えることができると考えている。そしてこのCOVID-19の感染がおさまったときに、引き続き、運動を身近なものに感じてもらえるようにもしていきたいと考えている。
- また今回の調査は自由記述を中心としたものであるが、この結果を踏まえ、選択肢アンケートを作成した。5月期から継続してのデータを収集していきたいと考えている。

今回の調査結果についての問い合わせ

澤江幸則 筑波大学体育系准教授 博士（教育学）

E-mail sawae.yukinori.ka@u.tsukuba.ac.jp